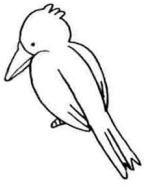
こども世界
名作童話
7

イソップ物語

もの　がたり

作・イソップ　文・西本鶏介



こども世界名作童話7
イソップ物語
一九八七年十一月　第1刷
一九九一年八月　第10刷

作　イソップ
文　西本鶏介
絵　村井香葉
発行者　田中治夫
編集　後藤敏彦・大熊悟
発行所　株式会社　ポプラ社
東京都新宿区須賀町五　〒一六〇
振替東京四―一四九二七一
TEL　〇三―三三五七―二二一六（編集）
〇三―三三五七―二二一一（営業）
印刷　瞬報社写真印刷株式会社
製本　島田製本株式会社

991
イソップ物語
ポプラ社　1991
126 p　22cm
こども世界名作童話7

©西本鶏介　村井香葉　1987　Printed in Japan
落丁本・乱丁本はいつでもおとりかえいたします。
ISBN4-591-02607-8

イソップ物語

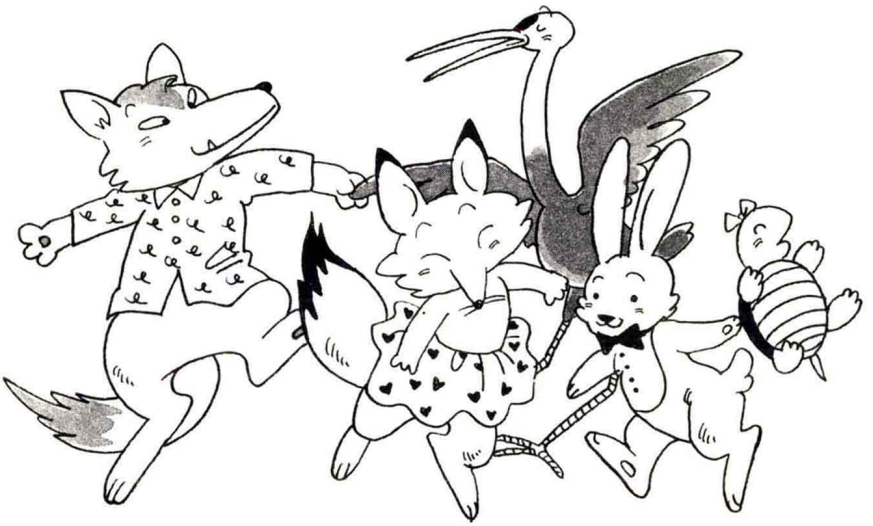
イソップ・作
西本鶏介・文
村井香葉・絵

こども世界名作童話 7

もくじ

ライオンとネズミ　4
いなかのネズミと町のネズミ　11
三頭の牛とライオン　18
カラスとキツネ　21
キツネとツル　24
キツネとブドウ　28
にくをくわえた犬　30
セミとアリ　33
アリとハト　36
ウサギとカメ　39
空をとんだカメ　44
母ガニと子ガニ　47
カエルの王さま　49
ワシとカブトムシ　56
馬の鳴きまねをしたトンビ　61

王さまになれなかったカササギ　64
シカのつのと足　68
しおをはこぶロバ　71
りこうなオオカミ　74
うそつきの子ども　78
ヤギかいとあたらしいヤギ　83
おひゃくしょうさんといたずらギツネ　87
鳥さしとマムシ　91
畑にうめたたからもの　93
ぼうのおしえ　97
北風と太陽　101
にげだした友だち　106
木こりと金のおの　109
あらしのあと　115
おろかなうらないし　118
古井戸におちた天文学者　121
解説　124



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ライオンとネズミ

ライオンが、ひるねをしていました。すると、一ぴきのネズミがやってきて、ライオンのからだの上にのぼりました。

「すべすべして、気もちがいいや。」

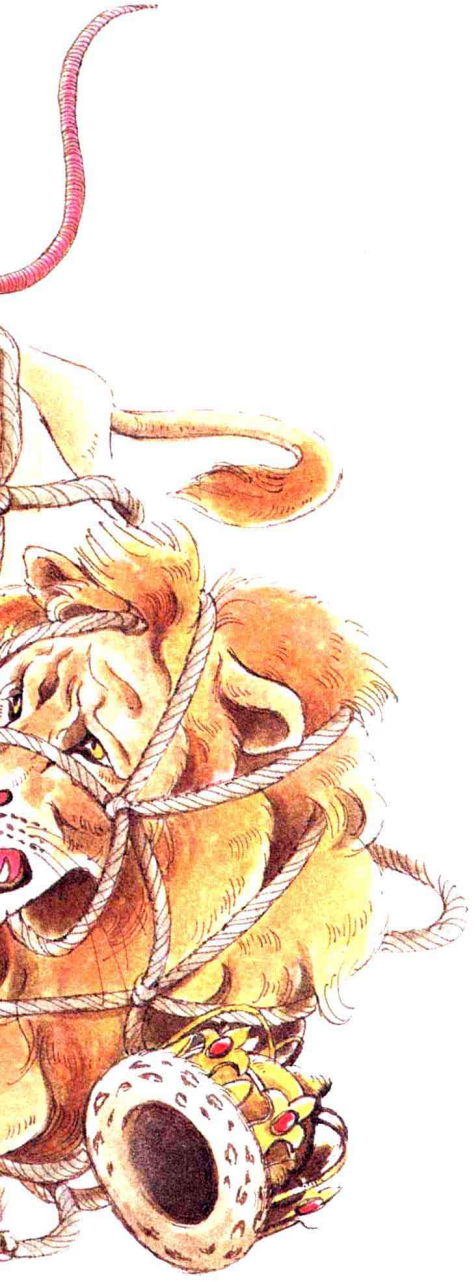
ネズミはライオンの上を、うれしそうにはしりまわりました。そのとたん、ライオンが目をさまして、ネズミをつかまえました。

「ひるねのじゃまをするとは、とんでもないやつ。」

ライオンがネズミをたべようとしたら、ネズミがなきそう

な声でいいました。
「おねがいです。どうか、いのちばかりはおたすけを。けっして、ひるねのじゃまをするつもりはなかったのです。
ライオンさんのからだが、あんまりすべすべしていたから、つい……。」
「いいや、ゆるすわけにはいかん。」
「そんなことといわないで。もしゆるしてくださるなら、きっとおんがえしをしますから。」
「なに、おんがえしだと。おまえみたいなちっぽけなやつになにができる。」
ライオンは、わらいだしました。

「いいえ、たとえ、ちっぽけなからだでも、きっとおやくにたつときがあるとおもいます。」
ネズミが、あんまりいっしょうけんめいたのむので、ライオンは、たべるのがかわいそうになり、
「わかった。いいから、さっさといけ。」
と、ネズミをにがしてやりました。
「やれ、やれ。もうひとねむりするか。」
ライオンはぐっすりねむって目をさましたら、なんと、からだがおもうようにうごきません。はっとしてからだをみると、なんと、ふといなわで木にしばりつけられているではありませんか。ライオンがねむっているあいだに、りょうした



ちが、ライオンを生けどりにしたのです。

「しまった！」

ライオンは、力をふりしぼって、なわをきろうとしました。

でも、もがけばもがくほど、なわがからだにくいこみます。

ライオンはくるしくて、なんどもうめき声をあげました。

すると、そのうめき声をきいて、さっきのネズミがかけつけてきました。

「だいじょうぶ、わたしがたすけてあげます。」

ネズミは、するどい歯で、なわのあちこちをかみきりました。

「ありがとう。たすかった。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

じゅうなからだになったライオンは、ネズミになんどもあたまをさげました。すると、ネズミがいいました。

「このまえ、あなたは、ネズミのようなちっぽけなやつになにができると、わらいました。でも、これでおわかりでしょう。ネズミにだって、ちゃんとおんがえしができることを。」

ライオンは、うつむいたまま、なにもいいかえすことばがありませんでした。

いくら大きくて強いものでも、ときには、小さくて弱いものの助けをかりなくてはいけないことがあるものです。だから、自分より力のないものをばかにしてはいけません。

いなかのネズミと町のネズミ

いなかに友だちをもっている、町のネズミがいました。

ある日、いなかのネズミから招待状がきました。そこで町のネズミは、いそいそといなかへでかけました。

ところがたべるものときたら、草と小麦ばっかり。町のネズミは、とうとうがまんできずにいいました。

「これじゃ、まるでアリのくらしとそっくりじゃないか。とてもたべられやしない。これから、ぼくのところへいこう。いろんなごちそうが山とあるぜ。なんだって、きみのすきな

ものをたべてもいいよ。」

そこでいなかのネズミは、町のネズミといっしょに町へでかけました。町のネズミの家の台所には、なんだってありました。やさいやパンやチーズにくだもの。それにハチミツやケーキまであります。

「すごいごちそうだ。」
いなかのネズミは、目をまるくしました。
（こんなごちそうが毎日たべられるなんて、町のネズミは、なんてしあわせものだ。）
いなかのネズミは、じぶんのふこうをなげきました。
「さあ、えんりょしないで、どんどんたべておくれ。」

町のネズミは、つぎつぎとごちそうをだしてくれます。いなかのネズミが、どれからたべようかと、まよっていたら、ふいにドアがあいて、男の人がはいってきました。

「にげろ！」

町のネズミがさけび、かべのやぶれにとびこみました。いなかのネズミも大あわてで、うしろからとびこみました。しばらくいきをころしていると、男の人が台所からでていきました。

「ああ、びっくりした。」

いなかのネズミが、ほっとむねをなでおろしました。

「もう、だいじょうぶだ。」

二ひきのネズミが、ごちそうのところへもどろうとすると、またドアがあいて、女の人がかおをだしました。二ひきはまたまた大あわてで、かべのやぶれにとびこみました。女の人は、ちらっと台所をのぞいただけで、ドアをしめました。

「こんどこそだいじょうぶ。もう、だれもきやしないよ。」

町のネズミが、かべのやぶれからとびおりていいました。

でも、いなかのネズミは、もうごちそうどころではありません。まだむねがどきどきしていて、おなかのすいているのもわからないほどです。

「ぼく、もういなかへかえるよ。」

「どうして？　せっかく、ごちそうしようとおもったのに。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com